

芭蕉の七夕歌

——「常の夜にハ似ず」が示すもの——

小林 竜 幸

はじめに

松尾芭蕉（以下、芭蕉とする）の句で『おくのほそ道』に記されている次の発句がある。

文月や六日も常の夜にハ似ず（二一頁）¹

この句は芭蕉が紀行の最中に今町（直江津）に立ち寄り、連歌会を催したときの発句である。

周知の句であるが、この句にある「常の夜にハ似ず」とは何を示しているか研究がなされていなかったように思える。七月六日も七夕の日と同じように日常と異なった雰囲気があるという解釈が一般的であろう。だが、江戸時代の七夕まつりがどのようなであったか、または直江津の地で行われる七夕まつりが芭蕉の認知する七夕と共通しているとは思えない。

乾氏²はこの句に関して次のように述べている。

前者は、七月六日夜（直江津にて）（曾良書留）の吟。

七夕にまだ一日あるが、早くも今宵はふだんの夜とは違った趣が感じられる。これは『古今集』俳諧歌に、（七月六日、七夕の心をよみける）と詞書して（いつしかとまたく心を脛にあげて天の河原を今日や渡らむ 藤原かねすけの朝臣）とある心を踏まえたものであろう。彦星の「またく

心」（あせりはやる心）が、六日の夜空に感じられると読めば面白いのではないか。

しかし、芭蕉の句の「文月や」という感嘆の表現には乾氏が述べる「あせりはやる心」のような焦燥感が感じられない。そこで、本論では、芭蕉の詠んだ「常の夜にハ似ず」の意味を明らかにしていきたい。そのために芭蕉の動向や作品との関連から新たな可能性を見いだしていく。

第一章 『曾良随行日記』からみる芭蕉の動向

芭蕉が元禄二年七月六日に直江津の地を訪れたことは『おくのほそ道』に記述はない。しかし、「文月や」の発句を詠んだことは『曾良随行日記』にある。『曾良随行日記』は芭蕉とともに『おくのほそ道』の旅程を歩んだ曾良が旅先での出来事を記録したものである。『曾良随行日記』の内容から「文月や」の発句を詠んだ状況を読み、七月六日の「常の夜」とは異なるところを明らかにする。

第一節 七月六日の直江津での様子

『曾良随行日記』³では、元禄二年七月六日の様子は次のよう

にある。

六日 雨晴。鉢崎ヲ晝時、黒井ヨリスグ濱ヲ通テ、今町へ渡ス。聴信寺へ彌三狀届。忌中ノ由ニテ強而不止、出。石井善次良聞テ人ヲ走ス。折節雨降出ル故、幸ト歸ル。宿、古川市左衛門方ヲ云付ル。夜二至テ、各來ル。發句有。

(二三頁)

曾良は今町(直江津)へ行くために「渡ス」と表現している。この語は水上を船または橋で移動する意味がある。芭蕉と曾良は直江津の地を船で渡ったことになる。また、直江津には関川があり、住人の舟か渡し場などで直江津の宿所まで行つたのだらう。

次に宿となる「聴信寺」に訪れたところ、忌中ということでは滞在を断られる。しかし、芭蕉と知つた石井善二郎が使いを送り芭蕉たちに戻ってもらうように交渉させる。雨が降り、聴信寺の近くにある古川市左衛門の屋敷で⁴宿泊するその時、芭蕉は連歌を嗜む人々と連歌会を催す。

聴信寺と古川市左衛門の屋敷を「空間A」、石井善二郎の使いが芭蕉と交渉した場所を「空間B」とする。続いて「常の夜にハ似ず」が示すものを考えていく。まず、黒井から関川を渡り直江津まで移動したことを「移動①」とする。次に空間Aから空間Bそして再び空間Aに戻る。この移動を「移動②」とする。これらの七月六日の動向から七月七日の七夕の日に同様の動きを行う。または連歌会を行うような出来事があつたのだらうか。この芭蕉の行動に焦点を当て、「常の夜にハ似ず」を明らかにしていくこととする。

第二節 連歌会の句

芭蕉は古川市左衛門の屋敷で連歌会を行う。ここで詠まれた句を考察していく。『曾良随行日記』に連歌会の記録がある。またこの連歌には今回取り上げた「文月や六日も常の夜に似ず」を発句としている。内容が次である。

直江津にて

文月や六日も常の夜に似ず

ばせを

露を乗せたる桐の一葉

石塚喜衛門左栗

朝霧に食焼烟立分て

曾良

蜃の小舟をハせ上る磯

聴信寺眠鷗

鳥啼むかふに山を見ざりけり

石塚善四郎此竹

松の木間より続く供やり

同源助布囊

夕嵐庭拂ふ石の塵

佐藤元仙右雪

たらい巻腰が行水

筆

思ひかけぬ篋をつたふ鳥一ツ

左栗

きぬくの場に起もなをらず

曾良

数に恨の品の指つぎて

義年

鏡に移す我がわらひがほ

翁

あはれなれあさ氣ハ月の色薄く

左栗

鹿引て來る犬のにくさよ

右雪

きぬたうつすべさへ知らぬ墨衣

眠鷗

たつた二人り山本の庵

左栗⁶

華の吟其ま、暮て星かぞふ

義年

蝶の羽おしむ蠟燭の影

右雪

春雨は髮剃兒の泪にて

芭蕉

香は色とに人くゝの文

曾良

同所

星^今宵師に駒ひいてとゞめたし

右雪 (二六八頁)

七月に行つた連歌会のため、秋を連想する句が全体を占める。その中で傍線部にある舟を想起する句がある。左栗の句は露が乗った桐の葉は船頭が舟を漕ぐ様子がイメージできる。眠鷗の句にも「小舟」を用いて連歌を続けている。このように舟が連句に取り上げられていることが分かる。曾良が七月六日の記述で記した「渡ス」から芭蕉が直江津にやつてきたとき、舟を用いてきたとも考えられる。

また、波線部のように夜の情景を取り上げている句もある。「常の夜にハ似ず」を受けての句とも思える。

以上のように『曾良随行日記』の記述にある六日の芭蕉の行動と「常の夜にハ似ず」が示すものを考えていく。そのために「七夕」を取り上げた韻文学について調べていく。

第二章 芭蕉と『万葉集』

第一章で、『曾良随行日記』の記述から六日の動向を知ることができた。この記述の内容と「七夕」に関する韻文学について関連性について考えたところ、『万葉集』の七夕歌がモチーフである可能性が高い。ここでは、芭蕉と『万葉集』の関連性について検証していくこととする。

第一節 『万葉集』の七夕歌

『曾良随行日記』によると芭蕉は直江津に行くために「移動①」として関川を渡っている。また「移動②」として場の移動を行っている。この行動に共通するのが『万葉集』の「月人をとこ」である。『万葉集』には四歌みられる。

夕星も 通ふ天道を 何時までか 仰いで待たむ 月人を

とこ (巻十二・二〇一・七八頁)⁷

秋風の 清き夕に 天の川 舟漕ぎ渡る 月人をとこ

(巻十二・四三・八六頁)⁸

天の原 行きて射てむと 白真弓 引きて隠れる 月人を

とこ (巻十二・〇五一・八七頁)⁹

天の海に 月の船浮け 桂梶 掛けて漕ぐ見ゆ 月人をと

こ (巻十二・二三・一一八頁)¹⁰

大船に ま梶しじ貫き 海原を 漕ぎ出て渡る 月人をと

こ (巻十五・三六・一一三頁)¹¹

傍線部の通り「月人をとこ」が詠まれている歌を抽出した。すると、波線部に共通する「移動①」と同じ「渡ス」の意味がある「渡る」が詠まれている。次に二〇一〇番歌にある夕星が「通ふ」という表現も行き来するように詠まれ、空間Aから「空間B」を往復する「移動②」と共通する。また、芭蕉が「文月や」の発句の連歌に詠まれていた舟も同様に詠まれている歌がある。このように七夕歌で「月人をとこ」を詠んだ歌には芭蕉の直江津で行った連歌会の句と共通する言葉が含まれている。

ここで芭蕉が詠んだ句の「常の夜にハ似ず」とは芭蕉自身「月人をとこ」と見立て、直江津での「移動①」・「移動②」の

出来事を総じて発句としたと考えられる。六日の出来事も七夕と同様に「月人をとこ」が舟を用いて移動するところが「常の夜」と異なっていると詠んでいるとみられた。

第二節 蕉風の『万葉集』

直江津での連歌会には『万葉集』の七夕歌をモチーフとして詠まれていることを論じてきた。では、芭蕉が俳諧に『万葉集』の要素を取り入れることが可能か検証することにする。芭蕉は『幻住庵記¹²』で次のように記している。

黒津の里はいとくろう茂りて、網代守ルにぞと読みけん
『万葉集』の姿なりけり。(三〇一頁)

これは「おくのほそ道」の旅を終えて近江の国で幻住庵を住まいとして過ごした記録である。黒津の里の様子を『万葉集』にある「網代守ル」の情景に似ていると記している。しかし、『万葉集』には「網代守ル」の言葉が含まれた歌がない。他の作品の歌と誤って書いた可能性が高い。ここからは芭蕉が『万葉集』知識が乏しく感じられる。

しかし、『素堂家集』に「芭蕉遺語¹³」として芭蕉十七回忌に書かれた文章がある。

六九『葛飾』序抄

今はむかしの友ばせをの翁、十暑市中に風月を語、七霜かつしかの隠れ家にともなふ。さすがに葛飾は萬葉集に、赤人・蟲丸の詠をのこされしより、其名もかうばしく、金城をさること遠からず、富士つくばを兩眼にながめ、上野淺草の花の雲、出る舟入舟眺望たやすくいひがたし。いつ

そ此のかつしかをことごとく見廻りなんと、ことぐさののみいひて、風雅のことしげきにやまされけん。

(三八七頁)

ここでは葛飾の情景について語り、『万葉集』に山部赤人や高橋虫麻呂が葛飾の情景を詠んだ歌が残っていることを話している。

芭蕉の『万葉集』の知識が感じられる。ところが、これは芭蕉が亡くなった後に書かれたもので、実際に語り、『万葉集』の知識が深いように感じられない。この他にも『万葉集』にまつわる内容は蕉門俳諧の作品から見られなかった。

第三節 芭蕉の書簡

『万葉集』と芭蕉の関連を作品から見ることではできなかった。しかし、紫藤氏¹⁴の論で次のようにある。

昭和五十六年秋、「漂泊の詩人——芭蕉展」で、北村季吟の『万葉拾穂抄』の出版を待望した芭蕉書簡を見て、自分なりに芭蕉観をまとめてみようかと心に決める。

北村季吟は芭蕉の師である。季吟の教えが蕉門俳諧を構成しているのだろう。紫藤氏が見た芭蕉の書簡は『芭蕉書簡大成¹⁵』にある。

極月五日

芭蕉翁

其角生丈

去来・允宵両子へ御心得たのみ存候。湖春御逢候はゞ、御心得。春は早々、于今残念に存候。万葉集出来候哉。急便

承度候。五条之老翁、御機嫌いぶかしく奉存而已。

この書簡は芭蕉が深川の芭蕉庵から寶井其角へ送ったものである。今回引用したところは追伸部分であり、其角は上方に旅行中である。傍線部にある「万葉集」は北村季吟が作成している『万葉拾穂抄』である。『万葉拾穂抄』は北村季吟の『万葉集』の注釈書で成立は貞享三（一六八六）年であるが、出版されたのは元禄三（一八九〇）年ごろと言われている。

ここから『おくのほそ道』の旅以前に成立していた『万葉拾穂抄』だが、江戸にいる芭蕉には読まれず、大垣までの旅を終えてから出版された。

このことから芭蕉が『万葉集』の知識体得に意欲的だった事がわかる。しかし『おくのほそ道』には直接『万葉集』は取り入れられなかったように思える。山下氏¹⁶も次のように述べている。

芭蕉は「万葉集」の名をよく知り、その歌を引きながらも、その関係は特に深いものではなかった。

山下氏は『おくのほそ道』や『続猿蓑』に『万葉集』によるものの可能性を説いている。しかし、実際ははっきりしていない。このように『万葉集』とのかかわりは蕉門俳諧には薄いものが感じられる。

第三章 芭蕉と柿本人麻呂

『万葉集』と蕉風俳諧の関連は直接見られなかった。しかし、『万葉集』の巻十ある七夕歌群は『人麻呂集』と共通するところがある。何氏¹⁷は次のように説く。

『万葉集』巻十「秋雑歌」の冒頭に「柿本朝臣人麻呂之歌集出」という左注が付されている七夕の歌（一九九六（二〇三三）三八首が有り、それに作者未詳の七夕歌（二〇三四（二〇九三）六〇首が加えられている。「月人をとこ」は人麻呂歌集七夕歌の一首、作者未詳七夕歌の二首に詠み込まれている。

そこで、芭蕉と柿本人麻呂の関連について検証していくこととする。

第一節 「人麻呂集」の七夕歌群

第二章で挙げた『万葉集』にある「月人をとこ」が読まれている歌は『人麻呂集』¹⁸にも共通してある。ここで「七夕」という歌題のあとに続く三十一の歌を取り上げる。

七夕

秋風に川風寒み彦星の今朝漕ぐ船に波のさわくか

（二一九）

天の河桐音聞こゆ彦星の織女星とこよひ逢ふらむ

（二二〇）

わがためと織女星のそのやどに織る白布は織りてけむかも

（二二一）

わが背子にうらびれをれば天の川船漕ぎ来らし桐の音聞こ

ゆ

（二二二）

天の河水陰草の秋風になびくを見れば時は来ぬらし

（二二三）

秋去れば川霧の立つ天の川川に向かひる恋ふる夜ぞおほき

(一二四)

天の川安の川原に定まりて心くらべば時待たなくに

(一二五)

天の川夜舟漕ぎ出でて明けぬとも逢はむと思ふ夜袖かへずあらん

(一二六)

天の河向かひに立ちて恋ふるとき言だに告げむ妹言問はむ

(一二七)

天の川安の渡りに舟漕ぎて秋立ち待つと妹に告げこそ

(一二八)

大空に通ふわれそら汝ゆゑに天の川原をなづみてぞ来る

(一二九)

久方の天の川原にぬえ鳥のうら泣きしつも恋しきまでに

(一三〇)

天の河行きてやみむと白真弓引きて隠る、月人をとこ

(一三一)

天の川夜は更けにつつさ寝る夜は年のまれらにたゞ一夜のみ

(一三二)

天の川瀬に立ち出でてわが待ちし君きたるなり人も聞くまで

(一三三)

恋ふる日は日長きものを天の川へだててまたやわが恋ひを

らん

(一三四)

天の河去年の渡りのうつろへば川瀬踏む間に夜ぞ更けにける

(一三五)

夕星も行き交ふ空をいつまでか仰ぎて待たむ月人をとこ

(一三六)

さ、がにの夜は更かしつゝさ寝る年は年のまれらにたゞ

一夜のみ

(一三七)

あからひく色妙の子の数見れば人妻ゆゑにわが恋ひぬべし

(一三八)

八千矛の神のみ代より乏し妻人知りにけり継ぎてしも思へ

ば

(一三九)

恋しきは日長きものを今だにもとしむべしや逢ふべき

夜だに

(一四〇)

万代を照るべき月も雲隠れ苦しきものぞ逢はむと思へ

(一四一)

万代と携はり居て相見とも思ひ過ぐべき恋ならなくに

(一四二)

一年に七日の夜のみ逢ふ人の恋も尽きねば夜は更けぬらん

(一四三)

(一四三)

白雲の五百重隠れて遠くとも **夜離れ**ずを見む妹があたりは

(一四四)

君に逢はで久しき時に織りきたる白袴衣垢つくまでに

(一四五)

わが待ちしみ萩咲きぬ今だにもにほひにいかな遠方人に

(一四六)

遠妻と手枕かへて寝たる **夜**は鶏「の」音鳴くな明けば明くとも

(一四七)

あひ見らく飽きたらねどもいなめの明けゆきにけり船出せむ妹

(一四八)

彦星を嘆かす妹が言だにも告げにぞ来つる見れば苦しみ(一四九)

第二章で『万葉集』から抽出した「月人をとこ」が詠まれている歌が二つあった。また波線部の通り「移動①」と共通する「渡る」が詠まれている。破線部のように「空間A」から「空間B」を往復する「移動②」を想起する語がある。二重傍線部の通り「月人をとこ」が詠まれている歌と同じく「舟」が詠まれてもいる。また連歌会にあった夜の情景を示す歌を囲み線で囲った。このように『曾良随行日記』にある七月六日の芭蕉の動向と共通するものがある。

ここで考えられるのは、芭蕉は『万葉集』を俳諧に取り入れようとしたのではなく、柿本人麻呂の歌風を俳諧に取り入れよ

うとした可能性が高い。そこで芭蕉が柿本人麻呂を憧憬し、俳諧に取り入れようとしているのか明らかにしていく。

第二節 蕉風にある人麻呂の歌

芭蕉は『おくのほそ道』の旅を終えて近江国の幻住庵に四月住む。近江の国は『万葉集』¹⁹⁾にある人麻呂の近江荒都の歌で詠まれた地である。もともと義仲寺の敷地内にある無名庵を住まいとしていたが、門人の菅沼曲水により幻住庵に招かれた。人麻呂の近江荒都歌は次の通りである(反歌を含む)。

近江²⁰⁾の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

玉だすき 畝傍の山の 檣原の 聖の御代ゆ (或は云ふ、「宮ゆ」) 生れましし 神のことごと つがの木の いや継ぎ継ぎに 天の下 知らしめししを (或は云ふ、「めしける」) 天にみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越え (或は云ふ、「そらみつ 大和を置き あをによし 奈良山越えて」) いかさまに 思ほしめせか (或は云ふ、「思ほしめか」) 天離る 鄙にはあれど 石走る 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は ことと聞けども 大殿は こと言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる (或は云ふ、「霞立ち 春日が霧れる 夏草が 繁くなりぬる」) ももしきの 大宮所 見れば悲しも (或は云ふ、「見ればさぶしも」) (巻一・二九・四二頁)

反歌

楽浪の 志賀の唐崎 幸くあれど 大宮人の 船待ちかね
つ

(卷一・三〇・四四頁)

楽浪の 志賀の へ一に云ふ、「比良の」大わだ 淀むとも
昔の人に またも逢はめやも へ一に云ふ、「逢はむと思へ
や」

(卷一・三一・四四頁)

傍線部①・②のように近江国の大津宮について人麻呂は詠んでいる。また傍線部③の荒れた旧都に夏草が茂る情景と類似した描写が『幻住庵記²⁰』にある。

日ごろは人の詣ざりければ、いとゞ神さび、物しづかなる
傍に、住み捨てし草の戸有。よもぎ・根笹軒をかこみ、屋
ねもり壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。

(三〇〇頁)

『幻住庵記』から引用した本文の傍線部は蓬や笹が鬱蒼と茂る幻住庵の様子がイメージできる。人麻呂の近江荒都歌と同様に夏の草に埋もれた旧都をモチーフとしているようにも読み取れる。

また、紫藤氏²¹は『おくのほそ道』の高館の段が人麻呂の近江荒都歌を倣って書かれていることを述べている。

芭蕉は、杜詩『春望』によりかわりながら、積極的に「草木深」を「草青みたり」と換えたのである。それは、「夏草」の語を、人麿の「近江荒都」の長歌に得て、その高館の段の執筆の構想は一大躍進をしたことを見逃すわけにはいかない。

つまり、芭蕉は蕉風に柿本人麻呂の歌風を取り入れようとしたのである。ここから「文月や」の句は柿本人麻呂の七夕歌をモチーフにつくられたのであった。また「常の夜にハ似ず」が示すものは人麻呂の七夕歌に詠まれた情景である可能性が高い。芭蕉は自分の身を客観視し、直江津で連歌を行うまでの動向が柿本人麻呂の七夕歌と同一するところがあり、発句とし、『おくのほそ道』にも「文月や」の句を取り入れたのだろう。

第三節 俳諧と『古今和歌集』

芭蕉が直江津での連歌会の発句に柿本人麻呂の歌風を取り入れたことを証明してきた。では、なぜ芭蕉は柿本人麻呂への憧憬や踏襲を蕉風に取り入れようとしたのか。この点について考察していく。

「俳諧」という言葉は『古今和歌集』にある「俳諧歌」がはじまりである。『三冊子²²』にも次のようにある。

『韻學大成』に「鄭察詩一語多」俳諧。俳ハ戯也、諧ハ和也。唐にたわむれて作れる詩を俳諧と云。また滑稽と云有。滑稽は昔仲（楚國に往て）楚人に答る也。本朝に一休和尚あり。是等は人に相當る答の辨の上に有りて、いはゆる利口也。『古今集』に「ざれ歌を俳諧歌と定む。是になぞらへて、連歌のただ言を世上俳諧の連歌と云。（二五四頁）傍線部にあるように『古今和歌集』にある「俳諧歌」から連歌のある技巧のないものを「俳諧の連歌」というとある。蕉風の俳諧では、『古今和歌集』を本質としていると言える。ここから芭蕉が柿本人麻呂の歌風を蕉風に取り入れようとしたのか

考察していくことにする。

すると、『古今和歌集』²³の仮名序に次のようにある。

古よりかく伝はるうちにも、ならの御時よりぞひろまりにける。かの御世や歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、正三位柿本人麿なむ歌の聖なりける。……(中略)……これよりさきの歌を集めてなむ、『万葉集』と名付けられたりける。(二四頁)

芭蕉は北村季吟から俳諧を学んでいる。季吟は「歌学方」という將軍家に和歌を指導する立場となった人物である。『古今和歌集』の知識も芭蕉は季吟から得ている可能性が高い。ここから芭蕉は俳諧に歌聖である柿本人麻呂の歌風を俳諧に取り入れ、俳諧を格上にしようと図ったものと考えられる。そのためにも人麻呂の歌を求めるために『万葉集』の知識体得に意欲的だったことも考えられる。

芭蕉が人麻呂の歌風を踏襲し、『おくのほそ道』に取り入れたのであれば、「文月や」の句にある「常の夜にハ似ず」が示すものは『人麻呂集』にある七夕歌であると言える。芭蕉にとつて直江津に訪れた七月六日の動向は人麻呂の歌を彷彿とした出来事だったのである。

おわりに

以上のように芭蕉の句にある「文月や六日も常の夜にハ似ず」の「常の夜にハ似ず」が示すものは柿本人麻呂の七夕歌群の情景であることがわかった。また、芭蕉が自身を「月人をとこ」と見立て、直江津を訪れた七月六日に七夕歌群を想起するよう

な出来事が起きていったこともわかった。このことを宵の連歌会の発句とし、『おくのほそ道』にも俳句として載せたと考えられる。しかし、いままで展開してきた本論は可能性の範囲の中でとどまっているように思う。蕉門俳諧にはまだ課題が多いところがあることも今回分かった。

すると「荒海や佐渡に横たふ天河」²⁴(三頁)の句についても問題が生じる。高館のとき同様に「文月や」の句と並び、七夕をイメージする「天河」を詠んでいる。「銀河の序」にもある句のため、七夕歌や多様な可能性があると感じられる。

また、本論で取り上げた『おくのほそ道』や『万葉集』、「柿本人麻呂」などの作品または歌人は国語科教材では定番と言えるものである。教材研究や学習活動においても新しい研究や実践を期待したい。

俳諧は多様な可能性や関連をもつ文字であることを今回改めて感じた。多くの人々から親しまれ詠まれている俳諧であるため、上代文学との関連だけでなく、異なる文学作品との関連を見出す必要があると考える。また、俳諧の創作や俳文とのかわり、連歌研究にも多くの可能性があると考える。各方面の分野について明らかにすることを期待したい。

- 1 本論の引用する『おくのほそ道』の本文、及び頁数は、久保田淳考注『松尾芭蕉集（新編 日本古典文学全集）』（小学館・平成十一年）による。
- 2 乾裕幸「芭蕉歳時記——一九一稲妻・七夕など」『俳句研究』（富士見書房・平成二年七月）
- 3 本論の引用する『曾良随行日記』の本文、及び頁数は、井本農一他考注『校本芭蕉全集（第六卷） 紀行・日記篇俳文篇』（富士見書房・平成元年）による。
- 4 3頭注による。
- 5 3に同じ。
- 6 3の頭注によると「栗」の誤記とある。
- 7 引用した本文は、小島憲之他考注『萬葉集（新編日本古典文学全集）』（小学館・平成六年）による。また巻、歌番号、頁数は巻次三による。
- 8 7に同じ。
- 9 7に同じ。
- 10 7に同じ。
- 11 引用した本文は、小島憲之他考注『万葉集（新編日本古典文学全集）』（小学館・平成六年）による。また巻、歌番号、頁数は巻次四による。
- 12 引用した本文は、井本農一・堀信夫注解『松尾芭蕉集（新編日本古典文学全集七〇）』（小学館・平成七年）による。また、本文は『猿蓑』所収本（D定稿本類）を採用した。井本農一他考注『校本芭蕉全集（第九卷） 芭蕉遺語集・書翰篇』（富士見書房・平成元年）による。
- 13
- 14 紫藤誠也「『おくのほそ道』の構想臆断——高館」『語文研究』（九州大学国語国文学会・昭和五七年）による。
- 15 今榮藏著『芭蕉書簡大成』（角川書店・平成一七年）による。山下一海「芭蕉と万葉集」『国文学解釈と鑑賞・昭和六一年』による。
- 16 何衛紅「人麻呂歌集七夕歌における『月人をとこ』」神戸松蔭女子学院大学研究紀要文学部篇（神戸松蔭女子学院大学学術研究委員会・平成二七）による。
- 17 引用した本文と歌番号は阿蘇瑞枝他著『人麻呂集（和歌文学大系 十七）』（明治書院・平成一六年）による。
- 18 引用した本文は、小島憲之他考注『万葉集（新編日本古典文学全集）』（小学館・平成六年）による。また巻、歌番号、頁数は巻次一による。
- 19 12に同じ。
- 20 14に同じ。
- 21 本論の引用する『曾良随行日記』の本文、及び頁数は、井本農一他考注『校本芭蕉全集（第七卷）歌論篇』（富士見書房・平成元年）による。
- 22 引用した本文は、小沢正夫、松田成穂校注・訳『古今和歌集（新編日本古典文学全集）』（小学館・平成六年）による。
- 23
- 24